

戦争と子どもたち ～学童疎開をめぐる展示実践の記録～

寺崎 香織、下地 真維

1. はじめに

宮古島市総合博物館では、毎年6月23日の「慰霊の日」*1に合わせて「平和展」を開催している。戦時中*2の宮古の人々のくらしや、米軍が撮影した当時の島の姿、戦争の跡や遺物など、テーマは毎年異なるものの、来館者に「戦争を知り、平和について語り合う場を提供する」という目的は一貫している。

戦後80年を迎え、戦争体験者の「生の声」に触れる機会が減少している今日、子どもたちや若い世代に向けて、戦争と平和を考える場を提供することは、博物館の重要な使命の一つであると考えている。そのため、展示構成や表現方法においても、来館者が自らの日常と比較しながら観覧できるよう工夫を重ねてきた。

こうした取り組みの一環として、当館では2021(令和3)年度に紙芝居『戦争と子どもたち～学童そかい～』を制作した*3。これは太平洋戦争末期の1944(昭和19)年8月に、宮古島の子どもたちが宮崎県小林市へ約1年半の期間、親元を離れて集団疎開をした「学童疎開」を題材にしたものである。当時の子どもたちが経験した不安や寂しさ、そして疎開先での様子を描くことで、紙芝居を読んだ現代の子どもたちが戦争や平和を「自分事」として考える契機となることを目指した。制作に際しては、文献調査に加え、体験者への聞き取りや鹿児島県鹿児島市・

宮崎県小林市での資料調査を行い、受け入れ側の当時の子どもたちにも出会うことができた。これらの調査は紙芝居の完成にとどまらず、展示の基盤を形成するものとなった。

この紙芝居は、2024(令和6)年度の平和展「戦争と子どもたち～学童疎開～」および2025(令和7)年度に小林市で開催された移動平和展の中心的素材となった。展示では、子どもたちの視点から戦争を捉えることで、来館者が自らの日常と重ね合わせながら戦争や平和を考えるきっかけを提供した。

本稿では、これら両展示について報告するとともに、展示を通して見えてきた課題と成果を整理し、これからの平和展のあり方について考察を試みる。



2021(令和3)年度に宮古島市総合博物館が制作した紙芝居『戦争と子どもたち～学童そかい～』

*1 沖縄県の条例で定められた沖縄の戦没者の霊を慰め、平和を祈る日

*2 一般的には1931(昭和6)年の「満州事変」から1945(昭和20)年の8月15日(終戦の日)までを「戦時中」とするが、本稿では1941(昭和16)年から1945(昭和20)年8月15日(終戦の日)までの「太平洋戦争期」を「戦時中」とする

*3 『宮古島市総合博物館紀要 第27号』にて報告している

2. 2024 (令和6) 年度平和展「戦争と子どもたち～学童疎開～」@宮古島市

(1)開催概要

本展示会は、「学童疎開」をテーマに、同タイトルの紙芝居に則しながら、戦時中の子どもたち、特に学童疎開を経験した子どもたちの姿を紹介したものである。学童疎開は親元を離れる不安や寂しさ、疎開先での新しい生活など、子どもたちに大きな心理的・生活的影響を与えた出来事でもある。本展示会の目的は、展示をとおして来館者に戦争が決して「他人事」ではないことを感じてもらい、「平和とは何か」を改めて考え、語り合う機会とすることであった。紙芝居を中心に据えた構成は、子どもから高齢者まで幅広い世代に親しみやすく伝わり、世代を超えた理解と共感を促す効果を持った。

開催期間は2024(令和6)年5月16日(木)から6月30日(日)までの40日間であり、会場は宮古島市総合博物館特別企画展示室であった。市民の方々をはじめ、学校関係者や観光客など幅広い層の来館があり、展示期間中の来館者数は2,131人に達した。その内訳は高校生以下332人、大学生19人、一般1,555人、70歳以上225人であり、一般来館者が最も多かった一方で、子どもたちや若い世代の来館も一定数確認された。世代を超えて展示が受け止められたことは、本展示会の意義を示すものである。

来館者からは「展示された絵に気持ちが引っぱられ、何とも言えなく涙が…子供や孫がいる私にとって、本当にやるせない思いです。人を想う気持ち、平和であることの大切さを強く感じました」といった声も寄せられ、展示の目的が来館者に届いたことを実感する機会となった。

(2)展示構成

本展示会は、来館者が学童疎開について紙芝

居の物語に合わせて深く知っていけるよう、紙芝居の各場面と関連資料とを組み合わせ構成した。展示は7つのセクションからなり、導入から終戦、そして平和への問いかけまでを一つの流れとすることで、来館者が「過去を知る」だけでなく「現在と未来を考える」ことができるよう工夫した。



2024 (令和6) 年度平和展の全体写真

①はじめに

来館者が、学童疎開がどのような歴史的背景の中で行われたのかを客観的に理解できるよう、戦争史略年表を展示し、当時の世界・国内・県内の動きを簡潔にまとめた。展示室の入り口に紙芝居の主人公である2人の兄妹のパネルを設置したことで、来館者が展示全体のテーマを一目でわかるようにした。



展示室の入口



スロープ部分

②戦前の宮古

昭和初期から 10 年頃の宮古の様子を紹介し、次第に生活が統制され戦争の足音が近づいてきたことを示した。紙芝居 1 枚目（市場の様子）とともに、食品サンプルや西里通りの略図、家庭用品購入通帳や衣料切符などを展示し、来館者が当時の暮らしを具体的に想像できるようにした。日常の風景から戦時体制への移行をイメージさせることで、戦争が人々の生活にどのように浸透していったかを考えてもらう効果を持った。



紙芝居とともに食品サンプルを使った市場の再現

当時実際に使用された家庭用品購入通帳、衣料切符の展示



③戦時中の学校

1941（昭和 16）年頃の学校生活を紹介します。

1943（昭和 18）年以降の軍隊配備による校舎接収と、子どもたちの学びの場の変化を説明した。紙芝居 2 枚目、3 枚目を用い、四大節や方言札、教科書、教育勅語のレプリカなどを展示したことで、来館者が当時の教育環境をイメージできるようにした。これにより、子どもたちがどのように国家的な統制の中で学び、また学びの場を失っていったのかを来館者へ伝えることができた。



戦時中の学校の様子を伝えるコーナー



学校で行われた四大節や方言札が使われていた様子



子どもたちが地域の御嶽や民家を借りて授業を行っていた様子

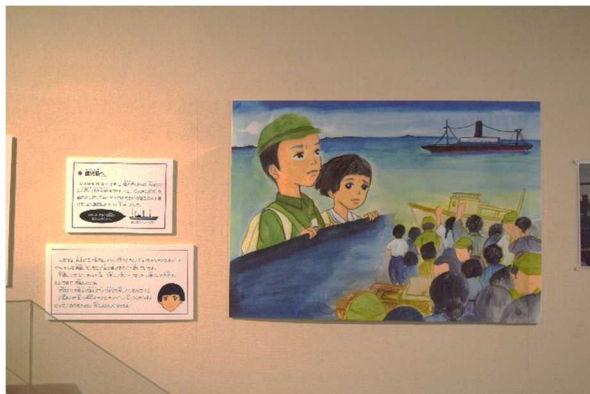
④学童疎開へ

学童疎開の推奨と宮古の子どもたちの疎開の流れを紹介し、一般疎開についても解説した。紙芝居4枚目(漲水港から「大徳丸」に乗船する場面)とともに、救命胴衣や疎開児童の写真を展示した。これらの資料は、疎開が単なる国の政策ではなく、子どもたちやその家族にとって切実な選択であったこと、疎開に向かう道中も命がけの航海だったことを来館者に伝える役割を果たした。

なお、疎開船「大徳丸」については、展示準備の際に船主である大阪商船(現在の株式会社三井)へ問い合わせを行ったが、詳細は不明のままであった。しかし令和7年度の移動平和展の準備にあたり再度問い合わせを行ったところ、写真資料が新たに見つかり、今回初めて展示することができた。この写真は、疎開について視覚的に示す貴重な資料のひとつとなり、展示の説得力を大きく高めるものとなった。



一般疎開で実際に使用されたトランク(右)と、イメージ用に展示した救命胴衣(左)



子どもたちが疎開船「大徳丸」に乗船し宮古を離れた様子



〔平良第一国民学校の疎開児童集合写真〕
学童疎開は教員が引率し、学校単位で行われた

⑤新しい土地での生活

疎開先の宮崎県小林町での生活についてエピソードを交えながら紹介し、寂しさや寒さ、食糧不足の厳しさを紙芝居7枚目、8枚目で表現した。また、小林市教育委員会や小林小学校、西小林小学校、宮崎県遺族連合会から借用した写真や学校日誌、防空頭巾や国民服などの資料を展示した。これらの資料は、来館者に疎開先での子どもたちの姿をイメージさせ、疎開生活の厳しさを身近に感じさせるものとなった。



紙芝居やエピソードとともに、小林小学校や西小林小学校に残る資料を借用して当時の子どもたちの様子を伝えた



小林小学校に残る「昭和十九年度初等科修了生方向調」



終戦後も小林市で自給自足の生活を送る宮古の子どもたちの様子



当時の宮崎県内、小林町内の様子を紹介



焦土と化した宮古。帰島した子どもたちは、変わり果てた町の姿を目の当たりにした

⑥終戦

紙芝居 11 枚目、12 枚目を用い、1945（昭和 20）年 8 月 15 日の終戦と、その後も疎開先で自給自足の生活を続けた子どもたちの「本当の終戦」を紹介した。1 年半ぶりに帰郷した子どもたちが見たであろう、廃墟と化した平良市街地の写真を展示し、戦争の爪痕を示した。また、宮古に残った子どもたちがどのように過ごしていたのかも説明し、当時誰もがそれぞれの戦争を体験したこと、戦争が終わったことは即座に平和の回復を意味しなかったことを来館者に伝えた。



宮古に残った子どもたちの様子についても紹介した

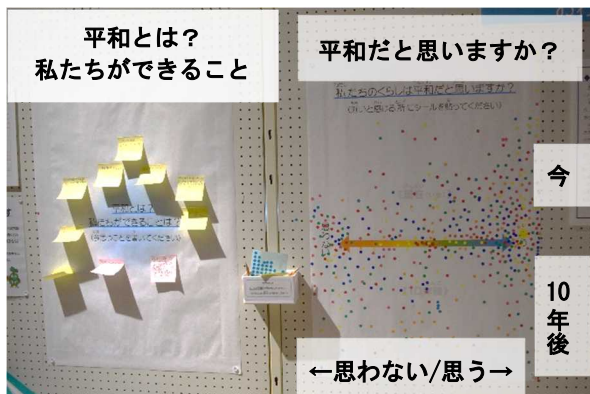
⑦おわりに

「平和な世界にするために私たちは何ができるのでしょうか？」と問いかけ、来館者に考えを促した。シール投票や付箋紙への記入による参加型の展示スペースを設け、来館者が自らの平和観を表現できる場とした。関連

書籍や制作した紙芝居を読み物コーナーに設置したことで、子どもから高齢者まで幅広い年代の方に利用していただいた。これにより、展示は単なる過去の記録ではなく、来館者自身が未来に向けて平和を考える場となった。



「おわりに」のコーナー



来館者は自らの考えを表現した



読み物コーナーには、参考にした文献や紙芝居を設置した

本展示会の構成は、過去に実際に行われた「戦争」についての提示と、紙芝居といった物語的な表現を組み合わせることで、来館者が学童疎開を「歴史的事実」としてだけでなく「自分事」として受け止められるよう意図されたものである。紙芝居を中心に据えた構成は、子どもから高齢者まで幅広い世代に親しみやすく伝わり、世代を超えた理解と共感を促す効果を持った。

(3) 平和講話

本展示会の開催期間中には、市内の学校から依頼を受け、合計 8 校（小学校 5 校、中学校 3 校）に赴き、平和講話を実施した。講話では、展示のベースにもなっている紙芝居『戦争と子どもたち～学童疎開～』を活用し、写真や解説を添えながら学童疎開の背景や当時の子どもたちの生活について説明した。紙芝居の場面を通じて、子どもたちが疎開に直面した不安や寂しさ、疎開先での厳しい生活をイメージできるよう工夫した。

また、ある学校の先生から「講話では話をするだけではなく、子どもたちを動かしてほしい」という要望が寄せられた。これに応えるため、展示の「おわりに」で設けた平和観を問う参加型コーナーを参考にし、講話の中でも「今が平和だと思いませんか？」「10年後は平和だと思いませんか？」と問いかける活動を取り入れた。児童・生徒を「はい」「いいえ」のチームに分けて意見交換を行い、なぜ平和だと思うのか、なぜ平和ではないと思うのかを議論し、「いいえ」と答えた人が「はい」に移るためには何が必要かを考える場を設けた。こうしたプロセスは、子どもたちが自ら平和の意味を考え、それを言葉にして主体的に意見を形成する機会となった。

従来、学校における平和集会は、戦争体験者が自らの体験を語り、子どもたちがその話を聞

くというスタイルが主流であった。しかし、戦後 80 年を迎え、体験者の高齢化により直接語りを聞く機会は減少している。その一方で、近年は博物館への講話依頼が増えているという実感がある。博物館が資料や紙芝居を用いて子どもたちと対話を行うことで、体験者の証言を補完しつつ、次世代に平和の大切さを伝える新しい形が広がりつつある。

2024 (令和 6) 年度平和展は、展示室内での観覧にとどまらず、市内の学校における平和教育へと広がりを持ち、世代間の対話を促す場として機能した。展示と講話が相互に補完し合うことで、来館者だけではなく、地域の子どもたちにとっても「平和を考える」体験が提供され、地域社会における平和教育のサポーターとしての博物館の役割を再確認する機会ともなった。



小学校での講話の様子
紙芝居の兄妹と並んで当時の子どもたちの身長と今の子どもたちの身長を比べた



中学校での平和講話の様子①
「今が平和と感じない」生徒が 1 人残った



中学校での平和講話の様子②
「どうしたら平和になるか」を考える生徒達

(4) 来館者の反応

本展示会では、来館者アンケートを通じて幅広い世代からの反応が寄せられた。回答からは、展示が来館者に学びや気づきを提供し、平和について主体的に考える契機となったことが確認できた。

「紙芝居が分かりやすかった」「方言札を初めて知った」「天皇の肖像画 (当時は、必死に守っていたという説明文) に衝撃を受けた」など、展示資料を通じて新しい発見や驚きを得た来館者が多かった。また、「戦争は二度としてほしくない」「平和を守りたい」「思いやりや助け合いが大切だ」といった声が寄せられた。

さらに「平和とは何か、私たちができることは何か」という問いかけに対しては、「思いやり」「戦争にならないようにする。誰とでも仲良くする」「過去を学び忘れない事。今いる身近な人、家族、友達、パートナー、自分を大切にすること」など、多様な回答が寄せられた。子どもから大人まで、平和を身近な生活や人間関係に結びつけて考える姿が見られ、展示が来館者に平和の意味を自分事として考えさせる効果を持ったことが分かる。

一方で、「もっと地域の人々の体験談を知りたい」「説明文を簡潔にしてほしい」「戦争体験者の証言を動画で残してほしい」といった要望も

あり、証言の継承方法や展示文のわかりやすさを高める必要性が課題として浮かび上がった。

総じて、展示が来館者に平和を考える契機を提供したことを示すと同時に、次年度以降の改善点を明らかにした。博物館活動は来館者の声を反映させながら発展していく必要があり、今回のアンケートはその方向性を考える上で重要な手がかりとなった。

(5)まとめと今後の展望

本展示会は、紙芝居を中心とした展示構成と、関連する実物資料や写真資料などを組み合わせることで、来館者に戦争と子どもたち、特に学童疎開をした子どもたちの様子を具体的に伝えることができた。また、展示期間中に行った平和講話では、学校での平和教育の場に広がりを持ち、子どもたちが主体的に平和について考える契機となった。

来館者アンケートからは「戦争は二度としてほしくない」「思いやりや助け合いが大切だ」といった声が多く寄せられ、展示が来館者に平和の意味を自分事として考えさせる働きを持ったことが確認できた。また、一方では展示に関する改善要望もあり、証言の継承や展示文のわかりやすさを高めることが今後の課題として浮かび上がった。

特に、戦争体験の記憶を伝える際には、その多様性をどのように表現するかが大きな課題である。戦争の記憶は、地域や世代、立場によって異なる経験や感情を伴っており、単一の物語として提示すると多様な現実を薄くしてしまう可能性がある。一方で、記憶の断片をそのまま並べるだけでは来館者に理解を促すことが難しい。展示においては、異なる記憶を尊重しつつ、来館者が自ら考え、対話を通じて多様な記憶を受け止められるような工夫が求められる。

全体的に、2024 (令和6) 年度の平和展は、展

示室内での観覧にとどまらず、学校での平和教育や地域社会に広がりを持ち、世代間の対話を促す場として機能した。今後は証言者の減少を補う新たな記録・継承の方法の検討、展示文や解説のさらなる検討、来館者の声を反映した参加型の展示の充実、戦争体験の記憶の多様性を尊重しつつ伝える方法の模索、地域や他館との係による資料調査の継続などをすすめることで、博物館活動を一層発展させていく必要がある。

本展示会を通して得られた成果と課題を踏まえ、次年度以降も「平和を考える場」としての博物館活動を続けていき、次世代に戦争の記憶と平和の大切さを伝えていきたい。

3. 2025 (令和7) 年度移動平和展「戦争と子どもたち～学童疎開～」@宮崎県小林市

移動平和展「戦争と子どもたち～学童疎開～」は、宮古島市・宮古島市教育委員会を主催、小林市・小林市教育委員会を共催として開催された。宮古島市からの移動平和展開催の打診に対し、小林市が承諾したことで実現したものであり、両市の協力によって地域を超えた平和展の開催が可能となった。

2025 (令和7) 年 11 月 7 日 (金) から 9 日 (日) までの 3 日間、宮崎県小林市の小林中央公民館大集会室にて開催され、展示は宮古島市総合博物館が担当した。開催初日の 11 月 7 日 (金) には、会場となった小林中央公民館において開会セレモニーが行われ、両市の市長や教育長など関係者が出席した。主催者・共催者から挨拶がなされ、地域を超えて平和展を開催する意義が改めて強調された。

以下では、移動平和展の経緯、展示構成、来館者の反応などについて記述する。

(1)開催の経緯と目的

宮古島市総合博物館で平和展を開催するにあたり、宮崎県内の関係各所から多大な協力をいただいた。各機関が所蔵する資料や小林市での聞き取り調査で得られた情報は、展示会で来館者に紹介することができた。展示会の内容、来館者アンケートの結果、寄せられた「平和への思い」を報告書にまとめ、お礼状とともに関係各所へ配布した。こうした経緯から、いつか小林市の方々に直接ご報告できる機会を持ちたいという思いがあった。

2025(令和7)年度は戦後80年、そして宮古島市市政施行20周年という節目の年にあたる。そのような年に、宮古島市の関係部局から「移動平和展を小林市で開催しないか」との提案があり、教育委員会と協力して実施する方向で一致した。市の関係部局の目的は「当時お世話になった小林市の皆様に感謝を伝えたい」というものであったが、博物館としては、疎開に複雑な感情を抱いた方々がいたことも承知しているため、単なる「お礼」ではなく、当時の出来事を小林市の方々に改めて知っていただき、「平和とは何か」を考える機会を提供することを重視した。

この移動平和展は、宮古島市と小林市の双方にとって、過去の出来事を振り返り、戦争と平和を考える新たな試みである。疎開を「送り出す側」と「受け入れる側」の両視点から見つめ、考える場を設けることで、「学童疎開」という出来事をより多面的に捉え直すことが可能となる。また、両地域での展示会を通じて、戦争の記憶を未来へつなぐ新しい形を模索する契機ともなった。

(2)展示構成

小林市での移動平和展は、「はじめに」から「おわりに」まで、2024(令和6)年度に宮古島市で

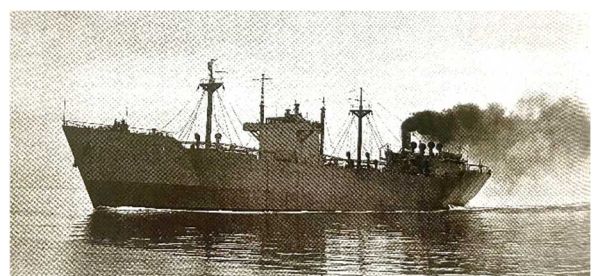
開催した平和展と基本的に同じ構成とした。他県での移動展ということもあり、新たに「宮古島ってどんなところ?」というパネルを作成し、地図や写真を用いて宮古島の概要を紹介した。



宮古島市の位置や特徴を簡単にまとめて紹介した

また、展示の中で使用されている言葉についても、方言を標準語に直したり、地名にルビを振ったりするなど、来館者に分かりやすいよう工夫を加えた。

展示資料の中では、株式会社商船三井が所有する疎開船「大徳丸」の写真を初めて公開することができた。



大徳丸の写真(株式会社商船三井所蔵)

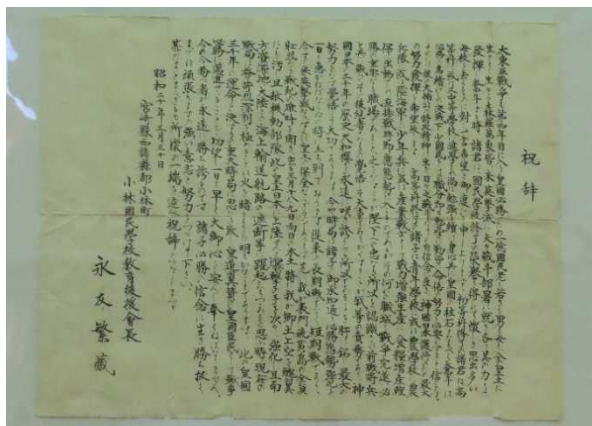
建造年: 1944(昭和19)年

建造所: 石川島造船所(現在の株式会社IHI)

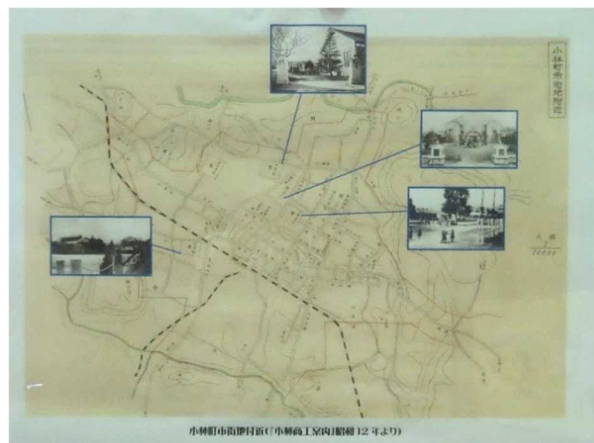
総トン数: 6,923トン

1944(昭和19)年10月22日、マニラへの増援軍を輸送する11隻の船団で門司発、11月9日揚陸完了して在泊中の11月13日、米海軍の第38機動部隊艦載機の来襲を受けて沈没した

さらに、小林市教育委員会が所蔵する 1944 (昭和 19) 年度の小林国民学校卒業式における後援会長の祝辞や、1937 (昭和 12) 年頃の小林町市街地付近の地図も展示した。これらの資料は、来館者が学童疎開を多角的に理解する手がかりとなり、展示の説得力を高めた。

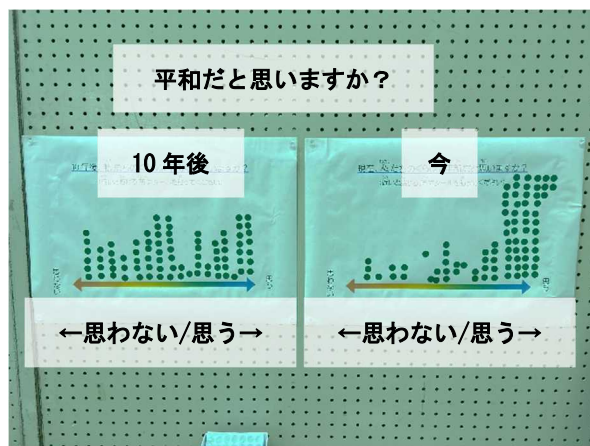


「昭和 19 年度 小林国民学校卒業式の後援会長祝辞 (原本)」(小林市教育委員会所蔵)
 生徒の卒業を祝うものではあるが、卒業してからも国のため、天皇陛下のため、鍛錬を惜しまず努力して戦争勝利に向け尽力しなくてはならないというような当時の時代を反映した祝辞となっている

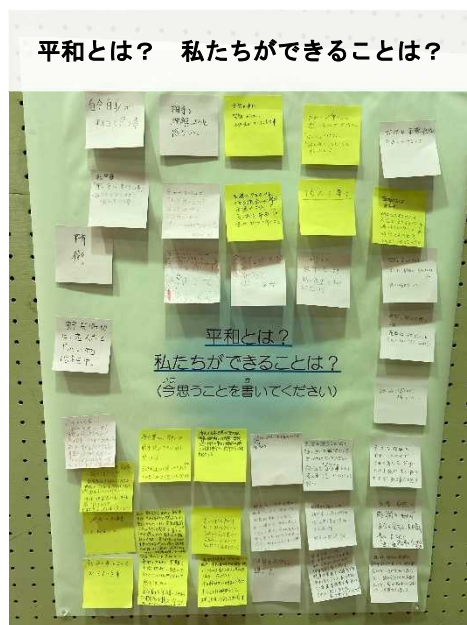


「小林町市街地付近 (『小林商工案内』昭和 12 年より)」(小林市教育委員会所蔵)

「おわりに」では、宮古島市での平和展と同様に来館者参加型のコーナーを設けた。「今は平和だと思いませんか?」「10 年後は平和だと思いませんか?」の問いにシールを貼ってもらい、「平和とは? 私たちができることは?」には付箋に自由に意見を書いて貼ってもらう形式とした。



「今」は平和だと思っている方が多く、思わない方は少なかった。一方、「10 年後」になると、平和だと思う方が減り、思わない方が増えた

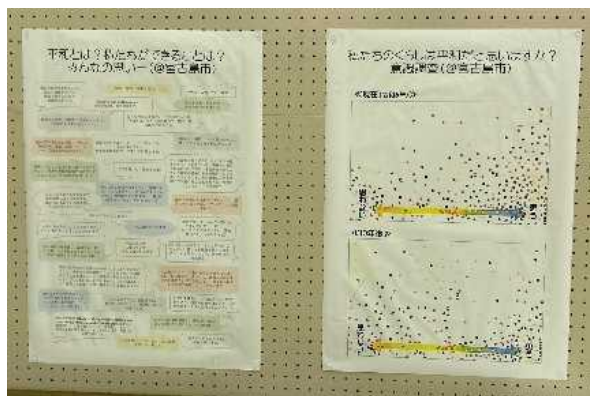


「だれもが『幸せ』と感ずることができること。『けんか』ではなく『話し合い』をしようとする心がけ」「日常の中に笑顔あふれ、子どもたちがすくすく育つこと」など、たくさんの意見がでた

さらに、宮古島での平和展の様子を写真で紹介し、宮古島の「おわりに」のコーナーで寄せられた言葉をパネル化して展示した。



宮古島市総合博物館での展示会の様子を紹介した



宮古島市の展示会で寄せられた意見を紹介した

加えて、学童疎開を体験された方の証言と小林市の方々へのメッセージを紹介し、紙芝居の複製を設置して読み物コーナーとした。

会場では紙芝居の映像も上映した。これは宮古島市総合博物館が制作した紙芝居をデジタルデータ化し、小林小学校に寄贈したものである。小林小学校の先生が紙芝居の裏面に書かれたセリフを声で吹き込んで映像化したものであり、現在も小林小学校や小林市内の永久津小学校において平和集会で活用されている。



映像として紙芝居が音声とともに流れるため、小さな子どもから高齢者まで幅広い世代の方々が足を止めじっくりと鑑賞した

移動平和展では、宮古島での平和展のように実物資料を展示することが難しかったため、資料を写真に撮影してパネル化し展示した。温湿度の管理ができないこと、監視のための人員を確保できなかったこと、展示ケースや什器の準備が困難であったことによるものである。

(3) 来館者の反応

移動平和展には延べ 287 人の来場があり、子どもから高齢者まで幅広い世代が参加した。来館者は小林市を中心に宮崎県内外から訪れ、アンケートや参加型コーナーを通じて感想や意見を寄せた。沖縄からの学童疎開について「知っていた」と答えた人は 29 人、「知らなかった」と答えた人は 13 人であり、展示が戦時中における小林市の様子を新たに知る機会となったことがうかがえる。

展示については「わかりやすかった」という声が多数寄せられ、写真やイラスト、紙芝居を用いた解説が分かりやすかったと評価された。特に紙芝居は子どもにも伝わりやすく、当時の様子を想像することができたとの感想が多かった。また、常駐したスタッフの説明やパンフレットの活用も、理解を深める要因となった。

印象に残った点としては、疎開児童の生活や

家族の心情、親子の別れの悲しさ、食事の少なさへの驚きなどが挙げられた。紙芝居の中で、主人公の兄妹がお母さんに抱きしめられた場面や、初めて雪を体験した場面に共感する声も多かった。さらに「今は平和だと思いますか」のグラフやシールアンケートの結果に触れ、来館者自身が平和について考える契機となったことが示されている。

「平和とは？私たちができることは？」への回答では、過去の戦争を正しく学び次世代に伝えること、政治や社会に関心を持つこと、日常生活で助け合いや思いやりを実践すること、武器ではなく話し合いで解決することなど、多数の意見が寄せられた。子どもたちからは「食べものを大切にする」「戦争で人がいなくなるのはいやだ。大人になっても忘れたくない」といった率直な声もあり、世代を超えて平和への思いが共有された。

また、来館者やその家族から聞いた戦争体験談も寄せられた。沖縄からの疎開者が近隣に住んでいた記憶、米軍機の襲来に「生きた心地がしなかった」と語った親族の話、疎開先で寒さや飢えに苦しんだ子どもたちへの共感などが記されている。さらに「語れる人が語れるうちに語り継ぐことが必要」との意見や、「3日間だけの開催はもったいない、再展示を希望する」との声もあり、展示が地域における記憶の継承と当時の戦争やこれからの平和について興味関心を持ち、平和を考える契機となったことが分かった。

(4)まとめと考察

今回の移動平和展は、宮古島市での平和展を基盤としつつ、小林市という新たな地域で開催することで、学童疎開の歴史を地域間で共有し、来館者に戦争の記憶を身近に感じてもらう機会となった。展示構成においては、写真や地図、

紙芝居など多様な資料を用いることで、子どもから高齢者まで幅広い世代に理解しやすい工夫がなされ、アンケート結果からも「わかりやすかった」との評価が多数寄せられた。

一方で、実物資料の展示が困難であったことや、開催期間が限られていたことなど、課題も明らかになった。来館者からは「再展示を希望する」との声もあり、今後同様の移動展を企画する際には実物資料の移動や長期展示を行う方法を検討する必要がある。また、戦争体験者が少なくなる現在、記録や証言をどのように保存し伝えていくかが重要な課題である。さらに、当時受け入れ側となった小林市の人々の中にも、複雑な思いを抱えながら子どもたちを迎え入れた方々がいたことを承知しており、その葛藤なども含めて多様な記憶を記録し、平和の思いを継承していくことが今後の平和展にとっても重要である。

会期中には小林市の市民と直接話をする機会があり、戦時中の体験談も聞くことができた。

「語り部をしたい」と申し出てくださる方もいたが、受け入れの体制やタイミングを考慮し、押しつけにならないよう慎重に対応した。そのため直接の働きかけは控えざるを得なかったが、もし語り部活動が実現すれば小林市の子どもたちにとって大きな意義があると感じ、惜しい気持ちも残った。

今後、宮古島からの移動平和展開催の継続予定はないが、両市で協力し合い調査を進め、それを子どもたちの平和学習に活用できれば非常に価値あるものになるのではないだろうか。

また、今回展示したパネルは小林市教育委員会に寄贈され、市内の各学校を巡回して子どもたちに紹介される予定であると伺っている。当館で制作した紙芝居とパネルの両資料が、今後も小林市で活用されることは、平和学習の継続にとって大変ありがたいことである。

総じて、この移動平和展は宮古島市と小林市の両地域の歴史を共有し合い、来館者自身が平和について考える契機を提供した。今後もこうした取り組みを通じて、戦争について知り、平和の大切さを次世代へ伝え繋いでいくことが求められる。

(5)今後の展望

今回の移動平和展を通じて、地域を越えて戦争の記憶や記録を共有することの意義と可能性が改めて確認された。学童疎開は、子どもたちの体験だけでなく、受け入れた地域社会の葛藤や努力も含めて多面的に捉える必要がある。今後は、こうした戦時中の様々な出来事や体験を次世代に伝えていくための仕組みづくりを、学校などの教育現場や地域の活動の中で継続的に進めていくことが求められる。

まず、戦争体験者の証言を記録するとともに、過去に記録された証言等を掘り起こし、語り部活動や映像資料、紙芝居など多様な形で継承していくことが重要である。体験者の声を直接聞く機会は年々減少しているが、その記憶を学校や地域の活動で知ること、子どもたちが「自分ごと」として戦争と平和を考える契機を得ることができる。証言は単なる記録ではなく、地域の歴史や人々の思いを結びつける貴重な資料であり、今後の平和教育の核となる。

また、今回小林市教育委員会へ寄贈したパネルや紙芝居を宮古島市でも活用し、学校や地域へ貸し出しができるようなキットの作成をすることで、より多くの子どもたちや地域の方たちが平和学習に触れる機会を持つことが期待できる。単発の展示にとどまらず、授業や地域行事などと連動させることで、日常的に戦争について知り、平和を考える環境を整えることが可能となる。さらに、持ち運びや設置が容易なキット化を進めることで、学校や公民館など多様な

場での活用が期待され、地域全体で平和教育を広げていく基盤を築くことにつながる。

今後は、宮古島市と小林市の両地域が協力し合い、学童疎開にとどまらず地域に眠っている戦時中の記憶や記録を相互に調査・研究していくことが望ましい。地域間で資料や証言を共有することで、より広い視野から平和を考えていける。もっとも、実現には人的・時間的な課題も多く、すぐに形にすることは難しいと思われる。しかし、理想的な方向性として示しておくことで、今後の検討課題や可能性を広げる契機となるだろう。

また、戦争体験の多様性を尊重しつつ、来館者が主体的に平和を考える場を広げていくことも重要である。展示や学習活動を通じて、異なる立場や世代の経験を理解し合い、その多様な記憶を共有していくことで、より深く「平和とは何か」を考えることができる。戦争の悲惨さを知るだけでなく、日常生活の中で助け合いや思いやりを実践すること、社会や政治に関心を持ち、対話を重ねることなど、平和を具体的に形づくる行動へとつなげることが求められる。

今後もこうした取り組みを積み重ねることで、戦争の記憶を風化させず、平和の尊さを次世代へと確実に伝えていくことができるだろう。移動平和展はそのための一つの試みであり、今後も地域間の協力を通じて新たな展開を模索していくことが期待される。



移動平和展の展示会場となった小林中央公民館



会場の様子①



会場の様子④



会場の様子②



会場の様子⑤



会場の様子③

4. 展示の波及と地域間の連係

(1) 展示資料の継続的活用

2025 (令和 7) 年度移動平和展終了後、展示に使用したパネルは小林市教育委員会へ寄贈され、市内の学校を巡回展示する予定となった。これにより、展示は3日間のイベントにとどまらず、地域の教育資源として継続的に活用される可能性を持つことができた。学校での巡回展示は、子どもたちが日常的に戦争の記憶に触れる機会を提供し、平和教育を地域社会に根付かせる重要な取り組みとなる。展示パネルは視覚的に理解しやすく、紙芝居と合わせて活用することで、子どもたちが戦時中に行われた学童疎開について「自分事」として受け止め、「平和とは何か」を考える契機となる。さらに、宮古島市でも同

様に、パネルや紙芝居を貸し出し可能なキットとして整備することで、学校や地域での平和学習に広がりを持たせることが期待される。こうした取り組みは、展示を「一過性のイベント」から「持続的な教育素材」へと転換させるものであり、博物館活動の社会的意義を大きく広げるものである。キットの作成が実現すれば、子どもたちだけでなく、保護者や地域住民にとっても平和を考える契機となり、世代間の対話を促す効果を持つ。展示資料が地域に根付き、学校生活などの中で繰り返し活用されることは、戦争の記憶を風化させないための大きな力となると考えられる。

このように展示資料の継続的な活用は博物館活動を「教育の実践協力」へと発展させるものであり、地域社会に根差した平和教育の基盤を築き上げる重要な取り組みとして位置づけられる。

(2) 紙芝居の映像化と教育現場での利用

当館で制作した紙芝居『戦争と子どもたち～学童そかい～』は、これまで展示や平和講話の中心的素材として活用されてきた。学校における平和集会などでは、希望があれば既にデータ化された紙芝居を読み聞かせる形で活用している。スクリーンに場面を投影し、博物館職員が声を添えて読み進めることで、子どもたちは物語を追いながら当時の子どもたちに自分たちを重ね合わせながら不安な気持ちや寂しさをイメージすることができる。こうした取り組みは、従来の「体験者の語りを聞く」形式に代わり、博物館資料を活用した新しい平和教育の形を示すものである。さらに、平和講話を依頼されなかった学校に通う生徒に聞いてみると、地域の戦争体験談をもとに劇をしたり、地域にある戦争遺跡を見学したり、沖縄戦関連の本を読んで感想文を書いたり、さまざまな取り組みが行

われていることが分かった。やはり、当時の地元の話の題材にすることが、子どもたちにとって最も身近で理解しやすい平和学習につながるのだと感じられる。そのような状況の中で、博物館としてはまず紙芝居の映像化とキットの作成の検討から始めたいと考えている。紙芝居を映像化することで、視覚と聴覚の両面から物語の中に入り込みやすく、来館者や児童生徒が戦時中における宮古の子どもたちの学童疎開についてより理解できるようになることが期待される。戦争体験者の証言を直接聞く機会が減少している今日、紙芝居の映像化はその代替となり得る重要な試みであり、次世代に記憶を継承する新しい方法として位置づけられる。

映像化された紙芝居は学校や地域行事の中で繰り返し利用できる素材となり、キット化されたパネルや資料と組み合わせることで、どの学校でも容易に平和学習を展開できるようになる。これらの取り組みは、博物館と学校や地域をつなぐ架け橋となり、地域全体で平和教育を広げていく基盤を築くものとなるだろう。

(3) 地域間関係の意義と可能性

宮古島市と小林市が協力して移動平和展を開催できたことは、地域の枠を越えて戦争の記憶を共有する新たな試みであった。学童疎開を「送り出した側」と「受け入れた側」の両視点から提示することで、来館者はこの出来事をより多面的に理解する契機を得ることができた。展示を通して、両地域の教育委員会や学校が連携し、資料や証言を共有する基盤が築かれたことは、今後の平和教育にとって大きな意義を持つ。

また、小林市の担当課による調査によって、1944（昭和19）年度の小林国民学校卒業式における後援会長の祝辞や、1937（昭和12）年頃の小林町市街地付近の地図など、小林市側が所蔵する当時の資料を展示に加えることができた。

これらの資料は疎開を受け入れた地域の姿を具体的に示すものであり、展示の内容を一層充実させる役割を果たした。宮古島市側の資料と組み合わせることで、学童疎開を送り出した側と受け入れた側の双方から捉えることが可能となり、来館者により深く理解を促す展示となった。

今後も両市が協力し合い、資料や証言、情報の共有を継続していくことが重要である。地域ごとに残されている記録や体験談を掘り起こし、相互に調査研究を進めることで、学童疎開を含めた「戦争」についてより深く、より広い視野から検証することができるだろう。こうした共同の取り組みは、展示の充実にとどまらず、次世代への平和教育に資する基盤を築くものへと発展していく可能性を示している。

(4) 課題と展望

一方で、今回の移動平和展では実物資料の展示が難しく、開催期間も3日間と短かったため、来館者からは「もっと長く見られるようにしてほしい」「再展示を希望する」との声が寄せられた。展示の準備にあたっては温湿度管理や監視体制、展示ケース等の什器や予算確保といった条件が整わず、実物資料を安全に移動・展示することが困難であった。こうした制約を克服し、資料をより長期的に公開できる方法を検討することは、今後の大きな課題である。例えば、複製資料やデジタル化した映像・写真を活用しつつ、一部の実物資料を安全に展示できる仕組みを整えることが求められる。

また、当時学童疎開を受け入れた側の人々や送り出された側の人々が抱いた複雑な感情をどのように伝えていくのかも重要な課題である。疎開児童を受け入れた地域の人々の中には、生活の厳しさや資源不足の中で子どもたちを受け入れることに葛藤を抱いた人々もいただろう。疎開児童や引率の教員たちに関しても同様に、

慣れない土地での生活に不安や困難を抱えていたことは想像に難くない。そのような声を展示にどう反映させるかは、単なる「感謝」や「美談」に収束させないために不可欠であり、両地域での共同研究や情報の共有を重ねながら模索していく必要がある。さらに、語り部活動の実現も望まれる。移動平和展の来館者からも、「語れる人が語れるうちに語り継ぐことが必要」との意見が寄せられ、証言の記録と継承の緊急性が改めて確認された。やはり「生の声」に勝るものではなく、語るができる方がいるのであれば、子どもたちとの対話の中で戦争の体験や平和への思いを直接伝えていただくことが最も効果的である。証言は時間とともに失われていくものであるため、今後は音声や映像による記録を行い、それを紙芝居や劇など多様な形で保存・活用していくことが求められる。

さらに、展示の波及効果を持続させ、地域間の関係を深化させることも展望として挙げられる。展示を通して得られた成果を次世代へ確実に伝えるためには、博物館と学校、地域住民が協力し合い、戦争の記憶を共有し続ける仕組みを構築することが不可欠である。例えば、学校の平和教育との連動による巡回展示や教材キットの整備、地域住民による語り部活動への協力、両市の共同研究による資料調査などが考えられる。こうした取り組みを積み重ねることで、2024（令和6）年の平和展や2025（令和7）年の移動平和展は一度限りの事業に終わるのではなく、地域社会に根付き、戦争の記憶や平和への思いを未来へとつなぐ持続的な活動へと発展していく可能性を持っている。

5. おわりに

本稿では、2024（令和6）年度平和展および2025（令和7）年度移動平和展の取り組みを中心に、その成果と課題を整理し、今後の展望に

について考察した。2021(令和3)年度に当館で制作した紙芝居は、戦時中に行われた学童疎開について子どもたちに伝えやすい形に構成したものであり、その後の展示活動の基盤となった。

2024(令和6)年度には、この紙芝居を中心に据えた平和展を当館で開催した。紙芝居の物語に加え、関連資料や証言を組み合わせることで、来館者が疎開した子どもたちの視点から戦時下の生活を追体験しやすい展示構成とした。来館者からは「当時の子どもの気持ちが伝わった」「地域の歴史を初めて知った」「家族で戦争について話すきっかけになった」などの声が寄せられ、展示が平和について改めて考え語り合う場となったことがうかがえた。一方で、語り部の確保の難しさや、展示内容をより深く理解してもらうための解説手法の工夫など、今後に向けた課題も明らかとなった。

2025(令和7)年度には、宮古島市より小林市に共催を依頼し、移動平和展を開催した。

2021(令和3)年度の紙芝居制作時の調査段階から協力を得ていた小林市で、正式に共催という形で移動平和展を実施できたことは大きな意義を持つ。移動平和展では、疎開を「送り出した側」と「受け入れた側」の双方から紹介する展示が可能となり、これまで一面的に語られがちであった出来事に複数の視点を加えることができた。これにより、来館者がより広い視野で学童疎開を考える契機となった。また、展示準備や開会セレモニー等を通して、小林市の自治体・教育委員会・学校と当館が連携し、資料や証言を共有する基盤が整えられたことも重要な成果である。

一方で、移動平和展では、実物資料の移動・展示の難しさ、短期間での運営体制の確保などの課題も浮き彫りとなった。特に、疎開体験には肯定的な気持ちだけではなく、戸惑いや不安、つらさなど多様な感情が含まれており、これら

をどのように伝えるかは宮古島市での平和展でも課題となり、移動平和展においても同様に丁寧な工夫が求められた。複製資料の活用やデジタル化に加え、紙芝居の新たな活用方法を検討したり、関連資料を整理・充実させたりするなど、複数の取り組みを組み合わせることで進めていく必要がある。

2021(令和3)年度の紙芝居制作から始まり、2024(令和6)年度の宮古島市での平和展、2025(令和7)年度の小林市での移動平和展へと続いた一連の取り組みは、戦争や平和について次世代へ伝えるための基盤を着実に築いてきた。今後も、展示活動にとどまらず、地域における学びの場を広げ、資料の公開や共有を通して、平和について考える機会を育んでいく取り組みが求められる。

謝辞

本稿で紹介した平和展および移動平和展の取り組みは、多くの方々のお力添えによって支えられたものである。紙芝居『戦争と子どもたち～学童そかい～』の制作にあたり、当時の体験をお話くださった皆様、資料を提供くださった関係機関の皆様には、心より感謝申し上げます。皆様から寄せられた言葉や資料は、展示を作る大切な土台となり、子どもたちが戦争や平和について考えるための大きな手がかりとなった。

また、宮古島市の学校関係者、小林市や小林市教育委員会、学校関係者の皆様には、展示の開催や資料調査の場面で多くのご協力をいただいた。特に移動平和展では、会場の準備や広報など、様々な面で温かいご支援をいただき、地域を越えて展示を実現することができた。ここに改めて深く御礼申し上げます。

展示会にご来館いただき感想をお寄せくださった皆様、講話の中で率直な思いを語ってく

れた子どもたちの声は、本稿を執筆するうえで大きな励ましとなった。

平和について考え、言葉にしてくださったすべての方々、関わってくださった皆様に、心からの感謝をお伝えして結びとしたい。